

第二回電磁気学レポート問題 解答例

福島孝治 (東大院総合文化)

問題 1

(1) この問題は、ガウスの法則を使うことによって、電場を計算する練習問題である。まずは無限に広がった場合を考えることにする..

対称性の考察

まず、一枚の平板板の場合を考え、求めた電場を後から二枚分重ねあわせることにする。平板からある距離にある点は、どこも特別な点はない。このことから、電場は平面からの距離だけにしか依らないことがわかる。そこで、適当な場所に z 軸を設定し、その軸上での電場を求めることは一般性を失わない。図1(左) から平面に平行の方向は必ずキャンセルされ、垂直な成分 E_z しか存在しないことがわかる。

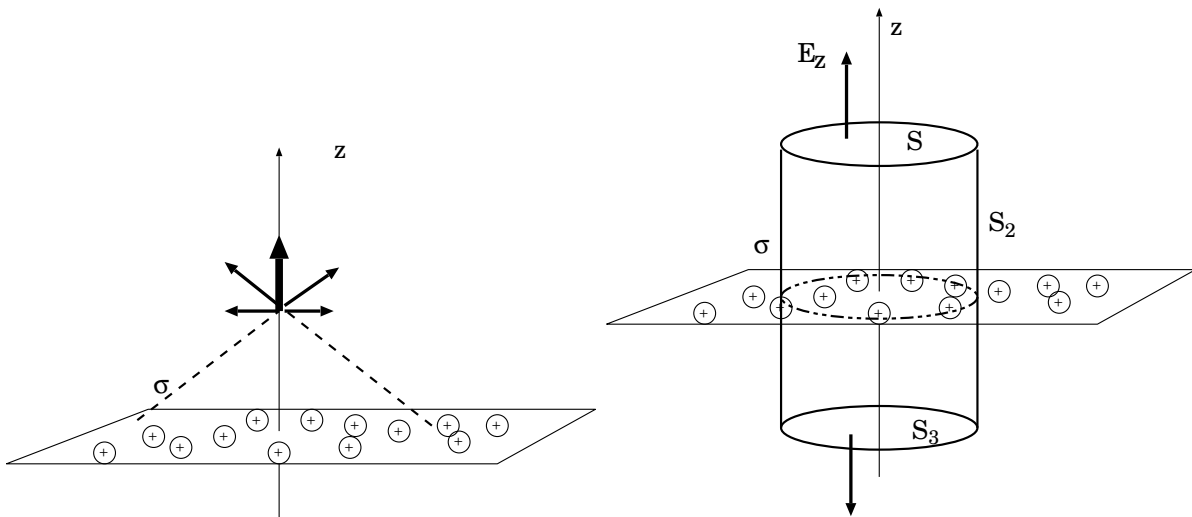


図 1: (左) 電場の xy 成分がキャンセルする様子. (右) ガウスの法則のあてはめ. 閉曲面は円筒とした.

ガウスの法則の当てはめ

いま、閉曲面として、断面積 A の円筒を選び、上下の両底面を帯電平面に平行にとる。上下の底面をそれぞれ、 S_1, S_3 として、側面を S_2 とする。この閉曲面に対してガウスの法則を当てはめる。

$$\int_{\text{閉曲面 } S} dS \mathbf{n} \cdot \mathbf{E} = \int_{S_1} dS \mathbf{n} \cdot \mathbf{E} + \int_{S_2} dS \mathbf{n} \cdot \mathbf{E} + \int_{S_3} dS \mathbf{n} \cdot \mathbf{E}.$$

ここで、側面 S_2 の法線方向は帯電面に平行であるから、電場と面の法線ベクトルは直交していて、 $\mathbf{n} \cdot \mathbf{E} = 0$ である。つまり、第2項は消える。上下底面での法線成分は E_z であり、面上の場所には依存しないことから、

$$\int_{\text{閉曲面 } S} dS \mathbf{n} \cdot \mathbf{E} = \int_{S_1} dS E_z + \int_{S_3} dS E_z = 2AE_z.$$

一方で、閉曲面に囲まれた領域に存在する総電荷量は $A\sigma$ であるから、

$$2AE_z = A\sigma/\epsilon_0 \implies E_z = \frac{\sigma}{2\epsilon_0} \quad \text{あるいは} \quad \mathbf{E} = \left(0, 0, \frac{\sigma}{2\epsilon_0}\right) = \frac{\sigma}{2\epsilon_0} \frac{\mathbf{z}}{|\mathbf{z}|} \quad (1)$$

少し驚いたことに、この電場は平面からの距離に依存しない。もはや選んだ閉曲面は円筒でなくてもよいことがわかる。

この結果から、平板二枚合わせるのがこの問題である。最も簡単なコンデンサーになっている。平板は無限に広いと仮定しているので、重ね合わせの原理から、 $E_z = \frac{\sigma}{\epsilon_0}$ となる。一様な電場が平板の間にのみ、面に垂直な方向に存在する。平板の外側では電場はキャンセルしてゼロになる。

(2) 電気力線を以下に示す。

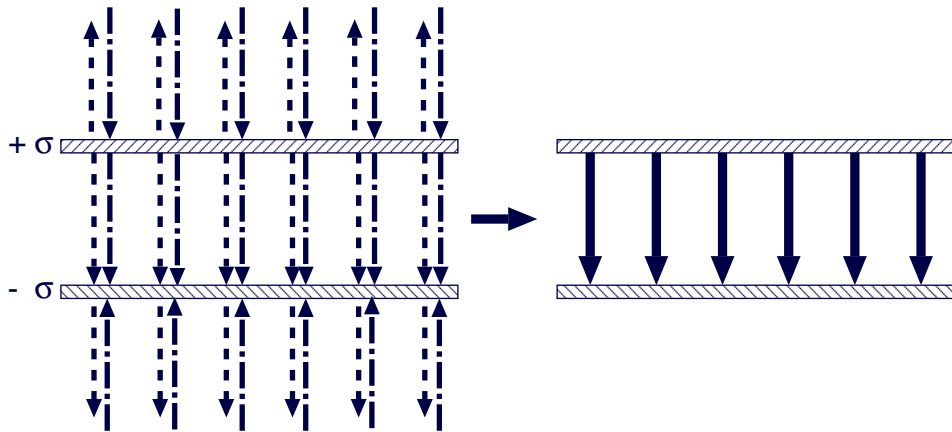


図 2: それぞれの平板が作る電気力線を左に示す。上の平板の作る電場の電気力線を点線で、下の平板のものを破線で描いた。重ね合わせた結果は右図のようになる。

このとき、二枚の平板の間の電位差 ΔV は、

$$\Delta V = \int_{\text{上} \rightarrow \text{下}} d\mathbf{x} \cdot \mathbf{E} = \int_0^d dz E_z = \frac{\sigma d}{\epsilon_0}$$

となる。また、平板の面積を S として、それぞれの平板に与えた電荷を $\pm q$ とすると、電位差は $\Delta V = \frac{qd}{\epsilon_0 S}$ となる。

補足: レポートの答案に次のような回答が多かったので、ここで少しコメントしておく。上記の解答では、二枚の平板を分けて、それぞれ求めて、重ね合わせたが、最初から二枚の平板について考察を試みる。

この状況でも、対称性から平板に平行な面上では電場の大きさは同じであることと、方向は面に垂直であることが対称性からわかる。次に、上面 S_1 を z_1 に、下面 S_3 を z_3 になるような円筒をガウスの閉曲面とした。 S_1 での電場を $\mathbf{E}_1 = (0, 0, E_1)$ 、 S_3 での電場を $\mathbf{E}_3 = (0, 0, E_3)$ とすると、ガウスの法則より、

$$\int_{S_1} \mathbf{n}_1 \cdot \mathbf{E}_1 + \int_{S_3} \mathbf{n}_3 \cdot \mathbf{E}_3 = SE_1 - SE_3 = 0$$

となる。ここで、 S_3 の法線ベクトル $\mathbf{n}_3 = (0, 0, -1)$ であることに注意する。ここから、 $E_1 = E_3$ となることがわかる。これを E_0 とおく。この議論は、 S_1 や S_3 の面の z 座標の

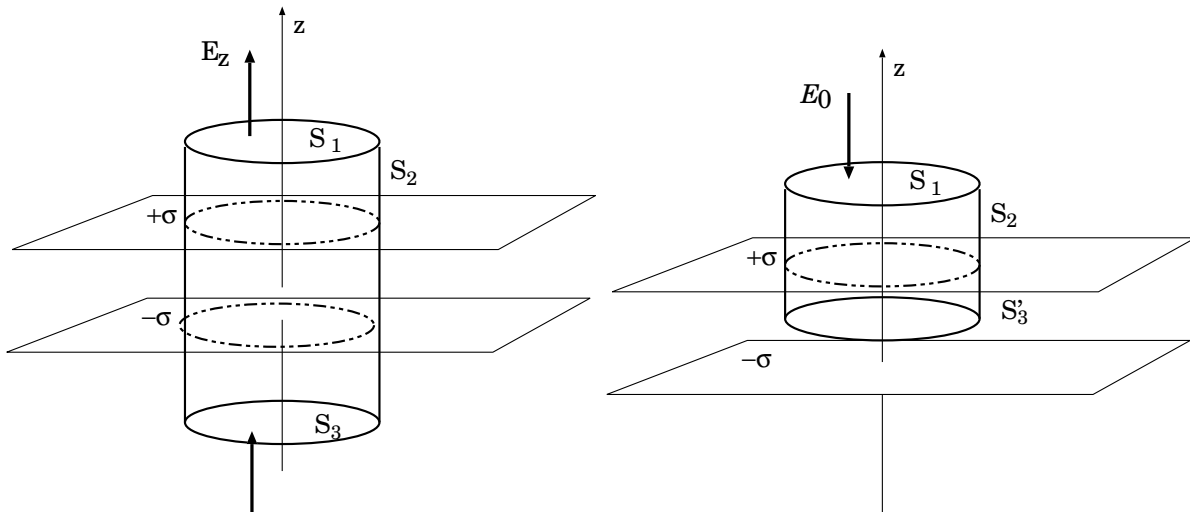


図 3: (左) 二枚の平板を貫くようにガウスの閉曲面をとる. (右) 上側の平板のみを貫くようにする.

位置をどのようにとっても同じであるので, E_0 は二枚の平板の外側である限り同じ値をとることもわかる. 大きさも方向もわからないが, $E_0 > 0$ とすると, S_3 から電気力線が入ってきて, S_1 から抜けて出て行くわけである.

次に, 右図のように上側の平板だけを貫くようにガウスの閉曲面を考えると, 平板間の面 S'_3 での電場を $\mathbf{E} = (0, 0, -E)$ とすると,

$$SE_0 + SE = S \frac{\sigma}{\epsilon_0}$$

となり, $E = \frac{\sigma}{\epsilon_0} - E_0$ となる. 一方, 下側の平板について, ガウスの法則をあてはめると,

$$-SE_0 - SE = SE_0 - S \left(\frac{\sigma}{\epsilon_0} - E_0 \right) = -\frac{\sigma}{\epsilon_0} S$$

となり, ちゃんとガウスの法則が成り立つことがわかる. つまり, このままでは, E_0 は決まらないこともわかる. ガウスの法則が成り立つことを要請するだけでは, 全体に E_0 が電場が貫いていても問題がないというわけである. それでは E_0 は本当になんでもよいのかというところではないだろう. この問題設定ではきちんと一意的に電場の大きさが決まるはずである. 何かの情報が落ちているのであるが, それはクーロンの法則でわかるべきことであろう. 二つの平板の作る電場を重ね合わせるとゼロであることを別の議論から導く必要がある.

(3) さて, 帯電平面が無限でない場合にどうなるかを考えてみよう. まず, 有限であることから, 並進の対称性は無くなってしまう. 例えば平面が正方形の場合は, 観測位置を平行移動するともはや元の位置とはずれてしまっている. 結果として, 図1(左)のように必ず電場の水平成分をキャンセルする相棒がいる保証はない. 唯一水平成分がキャンセルする位置は, ちょうど正方形の中心だけである. それ以外では水平成分は残る. もちろん, ガウスの法則はこの場合にも成立する. このとき, 上と同様な閉曲面を考えた場合, 側面からも電場のわきだしがあり, しかも側面の位置に依存していて, その積分を評価するのは大変面倒になる. ここまでくると, 「なぜガウスの法則だけから電場が求まることがあるのか?」という問いに答えられるであろう.

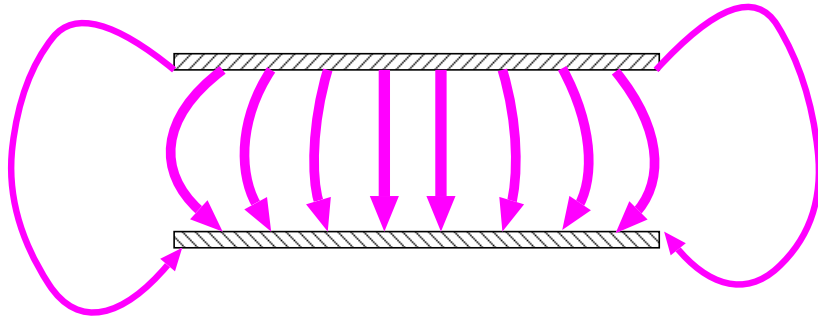


図 4: コンデンサーの大きさが有限のときの電気力線. 少し定性的すぎるかもしれないが, こんな感じ. コンデンサーの両端から電場はしみでている.

(4) どちらの平板も正の電荷を持っている場合は, 先の問題とは上側の平板の作る電場の方向が逆向きになる. 結果として, 平板間の電場が打ち消してゼロになり, 平板の外側のみに電場が存在する. その大きさは前問と同じである.

問題 2

(1). 今回のレポートのテーマはガウスの法則を理解すること. この問題もうまくガウスの法則を利用することを考える. まず, 点電荷を囲む半径 a の球を閉曲面として, ガウスの法則よりを適用すると,

$$\int_{\text{球}} dS \mathbf{n} \cdot \mathbf{E} = \frac{q}{\epsilon_0}$$

となる. 球を半分分割したとき, 上下の半球は同等なので, 電束は全球の半分となる. つまり, 求めたい電束 ϕ は,

$$\phi = \frac{q}{2\epsilon_0}$$

である. もちろん, 電場を積分して求めることもできる.

(2). 求める電束を ϕ_2 とすると, 前問の ϕ とあわせて, ガウスの法則から,

$$\phi + \phi_2 = 0$$

となる. 蓋をした閉曲面の内部に電荷はないからである. ここから, すぐに答えは,

$$\phi_2 = -\phi = -\frac{q}{2\epsilon_0}$$

とわかる.

(3). 蓋の形が変わっても, ガウスの法則は成り立つのである. 求める電束 ϕ_3 は, (1) で求めたものと同じである.

$$\phi_3 = \frac{q}{2\epsilon_0}$$

これも, やはり積分で求めることはできるだろうが, 面倒である.

第三回電磁気学レポート問題

福島孝治 (東京大学大学院総合文化研究科)

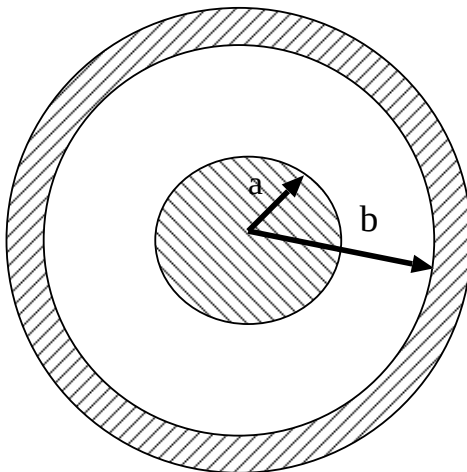
平成 26 年 11 月 25 日

問題 1 「ガウスの法則+電位」: 全電荷量を Q が一様に電荷分布した球 (半径 a) がある. 球の内部まで電荷は詰まっていることに注意しよう. つまり, 一様な電荷 (体積) 密度 ρ は, $\rho = Q / \frac{4\pi a^3}{3}$ である.

1. この電荷球体の作る電場をガウスの法則を用いて求めよ. 答えだけでなく, その考え方も示し, 電場の大きさを球の中心からの距離 $r(> 0)$ の関数としてグラフに図示せよ.
2. 電位を r の関数として求め, グラフに図示せよ.

問題 2 「導体系にガウスの法則を使う」: アルミでくるんだ半径 a のピンポン玉に電荷 $Q(> 0)$ を与え, その外側を右図のように**導体球殻** (内径 $b(> a)$, 外径 c) で囲んだ. 導体球殻の内側は絶縁体の膜があり, ピンポン玉の電荷は球殻には移動できないとする.

1. 下図のように, この導体球と導体球殻を同心に置いた場合に, 電荷はどのように分布するか説明せよ. 導体内部には電場はないことに注意せよ.
2. ガウスの法則を用いて, 電場を求めよ. 導体内部に電場がないことを確認せよ.
3. その場合の電位を求め, 図示せよ.
4. 導体球の中心が導体球殻の中心からずれた場合に, 電場や電位はどうなるかを理由を含めて説明せよ.
5. 導体球殻に電荷 $q(> 0)$ を与えたときに, どうなるかを理由とともに説明せよ.
6. 同じように電荷 q が帯電された導体球殻が沢山あり, その中の一つだけに上の電荷を帯びた導体球 (ピンポン玉) が入っているとすると, 導体球殻は透明でなく, 中は透けて見えない. このとき, どの導体球殻に導体球が入っているかを見つける方法を示せ.



問題 3: 講義の感想や自由に記せ.